

結社誌を訪ねて

中原 修子

磯傷の血止めも習ひ稽古海女

野中 亮介

「花鶏」三・四月号

福岡を拠点に、全国の仲間と句会をするのが楽しみとおっしゃる主宰の作品です。以前、野中氏は「遠かより帰るところの涼しくて」とも詠んでおられるように、渡り鳥の花鶏の群れのように俳句を楽しむ結社「花鶏」は、水原秋櫻子系統の流れを汲みます。正統花鳥風月詠に寄りながら、単なる写生ではなく、深い心情や土地に根付いた信仰や気配をも詠まれます。掲句の「海女」は三重県の鳥羽や志摩というよりも、地元の福岡県宗像周辺や長崎県対馬の素潜り漁かと考えます。資源豊かな対馬暖流でありながら、玄界灘などの浪荒く岩礁も多い場所が目に見えます。

海女は岩場で体を擦ったり、貝殻で手足を切ったり、海中で怪我することが多い職業です。その上、見習いとあれば、潜り方、息継ぎ、磯や波の読み方だけでなく、怪我をした時の対処も当然教わらねばなりません。海女独特の血止め法にはどのようなものがあるのか気になりますが、おそらく傷口に海藻や灰、よもぎなどを当てること、心臓よりも傷口を高く上げることなどではない

かと推察します。海女見習いの少女が、潜水技術とともに自身の怪我の対処法までも教わっている点に、この職業の厳しさと切なさを感じます。自然相手の海女という仕事の過酷さを実写的に描いた作品です。

ぼこぼここと春子生まるる山日和

山田 貴世

「波」五月号

初代青木泰夫主宰、二代倉橋羊村主宰の後を引き継ぎ、山田貴世主宰により創刊五十周年を迎えられた結社「波」です。山田氏は湘南の藤沢俳句協会初の女性会長としても有名です。今月号は一センチを超える分厚さで、「波」の歴史、特別企画の座談会など盛りだくさんです。また五十周年を記念して上梓された山田主宰の第五句集『草の花』の紹介や、それに寄せる同人の一句鑑賞もたくさん記載されています。この句集の帯の自選一句目には「太初よりおなご太陽女正月」とあり、その堂々とした詠みに圧倒されるとともに女性のありようを再確認させられました。素晴らしい作品が並ぶ俳句集でどれもこれも目を奪われますが、特に掲句の「ぼこぼここと」という軽やかな表現に魅せられました。椎茸が、倒木や枯れ木、あるいは櫓木から次々と顔を出してきます。「春子出づ」「春子生ふ」ではなく、「春子生まるる」という表現からは、昨日は気づかなかつたのに今日は丸い傘がひょっこり現れたのだという小さな驚きを感じます。枯れ木が次々と椎茸という新たな生命を生んでいるようで、ぼこぼここと赤ちゃんが生まれて

くるようなオノマトペが効いています。この句には、どこの山であるかは書かれておらず、誰が見ているか、あるいは椎茸採りとも書いてありません。しかし、「山日和」という下五の一語によって、風も雨もない穏やかな山の気配がひらけます。春子の誕生をそっと見守る空気がそこに満ちています。山そのものが子を産んでいるかのような神話的な感触が残り、読む者の記憶に深く刻まれます。

気がつけばみんな老人 蜃気楼

渡辺 純枝

「濃尾」五月号

六十代になってやれやれと思っていたら、いつの間にか高齢者の仲間入り、そのあとは急速に七十代、あれよあれよと八十代九十代へと突入していきます。この作品の面白さは、老人に焦点があるのではなく、気がつけばみんな蜃気楼のようであったという点です。若い頃は老人とは、自分とは別の世界の人々だと考えていたものです。しかし、ある年齢を越えると、老人とは特定の誰かではなく、自分を含めた「みんな」になっています。蜃気楼は実体があるようにでいて掴めません。振り返れば青春も壮年もまた蜃気楼のようであり、老人という姿さえも通過点に過ぎないのではないかと考え始めます。時の経つ不思議さと、誰もが等しく年を重ねてゆく親しみ、そしてやがて消えゆく存在の定めを、蜃気楼という季語は静かに照らし出しています。時間という不思議な概念が、この句の核心であり、俳句の十七音を越えた深い思索

にいざなってくれます。

月蝕のはじまる菊の総立ちに

権瓶 玲子

「青麗」五月号

「青麗」は高田正子主宰が二〇二四年の初めに創刊された新しい結社です。高田氏は黒田杏子氏主宰の「藍生」に学び、その系譜は山口青邨氏へと連なります。結社名に掲げられた「青」は、「藍生」の藍と「青邨」の青を継承する象徴であるとされています。今月号には句集を上梓された権瓶玲子氏の作品が掲載されており、その一つに心が惹かれました。掲句で、作者は月蝕が始まる空を仰ぎます。「月蝕がはじまる」という終止形の表現には「いよいよこれからだ」という期待が込められています。そして作者のみならず、庭や畑の菊もまた一斉に立ち並んでいます。菊はもともと茎が端正に立ち、「群れる」という性質を持っています。それを現代的な「総立ち」という語で表現し、古典的な「菊」という季語に新風を吹き込んでいます。月蝕という稀な天体現象に対して、「何事だ」「何か始まったぞ」と、まるで観客席の人々が立ち上がるかのように、菊たちが身を乗り出して見守っているような擬人化の表現が効果的です。菊の直立した姿そのものが、月蝕という異変へ向けられた観客の視線なのです。神秘的な天体現象へ向けられた無数の菊の視線が、まるで自然界全体がその瞬間に立ち会っているかのような不思議な高揚感を生んでいます。

（筆者住所

〒310-0853

茨城県水戸市平須町一八二八―五七二）